

## フランス語の受動的代名動詞と中間構文

井口, 容子  
広島大学大学院総合科学研究科准教授

<https://doi.org/10.15017/18944>

---

出版情報 : Stella. 29, pp.67-77, 2010-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# フランス語の受動的代名動詞と中間構文

井 口 容 子

## 1. はじめに

フランス語の受動的代名動詞は、英語やドイツ語における「中間構文」に対応するものと考えられることが多い。

- (1) a. Ce livre se lit facilement.  
b. This book reads easily. [英]  
c. Das Buch liest sich leicht. [独]  
the book reads REFL easily

だが受動的代名動詞を詳細に検討すると、典型的な「中間構文」とは性格を異にするものをかなり含んでいることが、近年の研究によって明らかになってきている。次の(2)-(4)のような受動的代名動詞は、英語やドイツ語の中間構文で表すことはできない。

- (2) Le polyester se nettoie avec précaution. (Yamada 2002)  
cf. \*Polyester cleans carefully. (Fellbaum 1985)  
(3) Ce genre de livres s'achète pour lire dans le train. (山田 1997)  
(4) Le caviar se mange avec de la vodka. (Ruwet 1972)

フランス語の受動的代名動詞と、いわゆる「中間構文」との関係はどうとらえるべきなのか。筆者は井口(2004, 2005, 2007)において、受動的代名動詞に「中間構文型」と「未完了受動型」<sup>1)</sup>の2つの下位クラスを設けるべきであると主張した。ただ「中間構文型」のものにしても、受動的代名動詞の諸用法の一角をなすフランス語のそれと、用法のかなり限定される英語等の「中間構文」とを同一の構文とみなしてよいのか。これらの疑問を前にして、本稿では「中間構文とは何か」を改めて問い直したい。その際、フランス語の代名動詞(再帰構文)研究において、これまで論じられることの比較的少なかった角度から検討する。まず中間構文は非対格か、それとも非能格かという問題を考察しよう。この問題は単に統語的な派生過程を論じるだけにとどまらず、意味論的

にも興味深い示唆を含み、かつ「総称性」の問題にも繋っていくからである。

本稿は以上のような理由から、前半の第2節においては英語を中心とした、典型的な中間構文を対象として分析を行う。その上で第3節において、フランス語の受動的代名動詞に考察をすすめていきたい。

## 2. 中間構文

### 2.1. 中間構文は非対格か非能格か

英語の中間構文をめぐるのは、これを「非対格」の構造とみなすか、あるいは「非能格」とみなすかという議論がある。従来、生成文法においては中間構文は受動文などに似た派生過程をもつとされ、基底において直接目的語の位置にあった名詞句が、主語位置に移動して派生される構造を有するとされてきた (Keyser & Roeper 1984 等)。だが Ackema & Schoorlemmer (1995) は、英語およびオランダ語の中間構文にかんして、受動文とは全く異なるプロセスにより形成されると主張する。彼らによれば、中間構文の表層の主語は外項 (external argument) であり、基底の構造 (D-Structure) の主語の位置に直接生成される。したがって従来想定されてきたような名詞句の移動は、中間構文には関与してこない (p. 174)。これによると中間構文は「非能格」ということになるのである。Ackema & Schoorlemmer はこの主張を裏付けるものとして、オランダ語の中間構文がいくつかのテストに対して「非能格性 unergativity」をあらわすことを示している。

Ackema & Schoorlemmer (1995) が根拠としてあげている現象には、むしろアスペクト特性に結び付けて考えるべきなのではないか、と思われる例も多い。たとえば「adjectival passive の不可」(p. 190) などは、中間構文が「反使役化」とは異なる特性として有する「未完了性」に帰せられるべきものであり、必ずしも統語構造的な「非対格性」を否定するものではない。

ただ、非能格性の証拠とされる現象の中で «-er Nominal» にかんするものは注目に値する。2.2. 節においてはこの現象を詳しくみてみたい。

### 2.2. -er Nominal —— 中間構文の主語の擬似動作主的性格 ——

player, singer など、英語において接尾辞 -er を伴う名詞は、動作主 (agent) に代表される動詞の外項を名詞化したものである。したがって非能格動詞にお

いては可能であるが、非対格動詞からは形成することができないとされる。だが Ackema & Schoorlemmer (1995) は、オランダ語の *-er* Nominal に相当する名詞には、(5) のように中間構文の述語から派生されたと考えられる例があると指摘する。

(5) a. Dit zijn lekkere *stappers*.  
 these are comfortable walkers  
 ‘These are comfortable shoes.’

b. Dat is een prima *rokertje*.  
 that is a fine little-smoker  
 ‘That is a fine cigar.’

(Ackema & Schoorlemmer 1995 : 195)

(5a) の *stappers* が表しているのは字義通り英訳すると *walkers* であるが、下に付された訳文が示すように「歩く人」ではなくて「靴」である。

Rappaport Hovav & Levin (1992) も英語の *-er* Nominal にかんして同様の指摘を行っている。Rappaport Hovav & Levin は (6) のような例をあげて、これらは中間構文の動詞から派生されたとする。たとえば (6b) の *broiler* の解釈は、*This chicken broils well.* という中間構文の解釈に近いというのだ。

(6) a. baker (= potato)  
 b. broiler (焼き肉用の若鶏)  
 c. best-seller

(Rappaport Hovav & Levin 1992 : 149)

Rappaport Hovav & Levin (1992) は、これらの *-er* Nominal の存在は、中間構文の動詞が語彙レベルにおいて、「直接内項の外項化 (externalization of the direct internal argument)」の操作を受けていることを示す証拠となり得ると述べている (p. 149)。

たしかに (6) のような *-er* Nominal や (5) のオランダ語の例をみていると、中間構文の主語が agent に近い性質をもっているかのような印象を受ける。本来内項であったものが中間構文においては外項化されているというの直感レベルにおいて頷ける。

Van Oosten (1977) は、中間構文の主語は被動者 (patient) の意味役割を担うものであるが、擬似動作主的性格を併せ持つことを指摘する。これは、中

間構文においては主語名詞句の指示対象に内在する属性が事態の成立に対する一義的責任 (primary responsibility) をもっているためである。このような中間構文の意味的側面と、(6) のような *-er Nominal* が可能であるという事実は無縁ではないだろう。

いずれにしても語彙レベルにおいて直接内項が外項化されているのであれば、中間構文は非能格の構造をもつということになる。

### 2.3. Kageyama (2006) の分析——個体レベルの叙述としての中間構文——

Kageyama (2006) は中間構文は、日本語や英語にみられる「異常受身 peculiar passive」と呼ばれる構文とともに属性叙述文であり、「個体レベルの叙述 individual-level predication」とみなす。さらにはスペイン語等の例を引いて、再帰構文にも同様の分析が可能であるとする。

その上で Kageyama (2006) はこれらの文の主語にかんして次のように分析する。属性叙述文である異常受身の主語は、一般の受動文のように NP-movement による移動を受けるのではなく、topic phrase に基底生成 (base-generation) される (p. 92)。Kageyama は英語および日本語の中間構文の主語にかんしても、同様に基底生成されるものと考えているように思われる。このあたりの Kageyama の考え方は、ここまでみてきた中間構文を非能格とみなす立場に近いといえる。

さらに Kageyama (2006) は、異常受身と中間構文の違いとして、前者が統語レベルにおいて派生されるのに対して、後者は語彙レベルにおいて派生されるものとみなす (p. 100)。語彙レベルにおいて、 $(Ev(x<y>))$  という項構造 (argument structure) に lambda abstraction を含む一連の操作が適用されて、 $\lambda y(Ev^{\wedge}(x^{\wedge}<y>))$  という中間構文 (Middle) の項構造が形成されるのである。

#### (7) Middle formation at Argument Structure

$(Ev(x<y>))$

a. Ev-suppression  $\rightarrow (Ev^{\wedge}(x<y>))$

b. collateral suppression of agent  $\rightarrow (Ev^{\wedge}(x^{\wedge}<y>))$

c. property description by lambda abstraction  $\rightarrow \lambda y(Ev^{\wedge}(x^{\wedge}<y>))$

(Kageyama 2006 : 102)

## 2.4. 形容詞述語に近い性格

2.1. ～ 2.2. 節でみた, 中間構文を「非能格」とみなし, その主語は基底の主語の位置に生成されるという考え方, および 2.3. 節でみた Kageyama (2006) の分析を考え合わせると, *read easily*, *photographe well* といった中間構文の述語は, ある意味において *intelligent*, *beautiful* 等の「個体レベル述語」の形容詞に近いといえることができる。

Kageyama (2006) が示す, 形成過程を経て到達した中間構文の意味的な構造 (7c) は, *washable*, *eatable* などの動詞派生の形容詞のそれに類似している。Miller (1978) は, 動詞 *move* から形容詞 *movable* を派生する操作である「-able 付加 (-able affixation)」の意味的側面を次のように記述している。

(8) a. *move*

MOVE (x, y)

b. *movable*

$\lambda y (\exists x) [\text{POSSIBLE}(\text{MOVE}(x, y))]$

(Miller 1978 : 115)

## 2.5. 経験者の for NP

英語の中間構文は, (9) にみられるように for NP を伴うことがある。

(9) a. That book reads quickly *for Mary*.

b. No Latin text translates easily *for Bill*.

(Stroik 1992)

この for NP は, (10) のような文にみられる by NP は大きく性格が異なる。

(10) That book was read *by Mary*.

(10) の by Mary は, この文が記述するイベントに参加する項としての動作主を直接表しているが, (9a) の for Mary は「Mary にとって」ということであり, 「この本はすぐ読める」という事態の適用領域を限定するものである。意味役割としては「経験者」といえることができる。

同様の for NP は, Ackema & Schoorlemmer (1995) が指摘するように, 中間構文ではない, 形容詞述語の文においてもみられる。

(11) That book is too thick *for Mary*.

(Ackema & Schoorlemmer 1995 : 179)

この経験者の for NP を従えうるといふ事実も、英語の中間構文の述語が形容詞に近い性格であることを示唆していよう。

### 3. フランス語の受動的代名動詞

#### 3.1. 非対格性

以上、英語やオランダ語などのいわゆる「中間構文」にかんして、まずこれを「非能格」とみなし、表層の主語は基底の構造の段階から主語位置に生成されると考える立場があること、次にその立場にはかなりの妥当性が感じられること、そして最後にこのような観点に立てば、中間構文の述語は個体レベル述語の形容詞に近い性格をもつと考えられること、という3点を確認した。

それではフランス語の受動的代名動詞はどうであろうか。まず非対格性／非能格性の問題について考えてみよう。Ackema & Schoorlemmer (1995) が行っているテストの中にはフランス語の代名動詞には適用しにくいものもあり、単純には比較できないところもあるのだが、少なくとも完了の助動詞の選択にかんしてはオランダ語とは異なり、フランス語の受動的代名動詞は非対格のパターンを示している。

(12) a. La question *s'est* discutée hier matin avec passion dans la salle du conseil.

b. Les cuisses de grenouilles se *sont* mangées pendant longtemps.

(以上, Boons, Guillet & Leclère 1976)

フランス語の受動的代名動詞は、いわゆるアスペクト制約により複合時称をとることはまれであるため用例は少ないが、(12)に示すように助動詞として être が用いられている。

Ackema & Schoorlemmer (1995) は、中間構文を「非能格」とみなす彼らの主張は、あくまで英語やオランダ語を対象になされており、Cinque (1988) を引きながら、イタリア語の中間構文は移動 (movement) によって派生されたものであり得る、としている (p. 175, fn. 2)。また Lekakou (2008) も英語、オランダ語などのゲルマン系の言語の中間構文は非能格であるが、フランス語の中間構文はギリシア語のそれとともに非対格であるとする。

筆者はフランス語の受動的代名動詞のうち、少なくとも井口 (2007) で「未完了受動型」と呼んだタイプのもは、非対格であると考え。この点にかん

しては次節において述べる。一方、「中間構文型」については問題がやや複雑である。このタイプのもは英語やドイツ語の中間構文に意味的に近いものであり、本稿2節で述べてきたように非対格／非能格の構造的相違が、意味的な相違を反映しているのであれば、「中間構文型」は非能格、という可能性もないわけではない。しかしながら、ここで考慮したいのは経験者を表す前置詞句との共起可能性である。2.5節において英語の中間構文は経験者を表す「for NP」と共起することをみた。フランス語においてこれに対応する前置詞句である「pour NP」を、中間構文型の受動的代名動詞の文に付加して3人のインフォーマントに示したところ、以下の結果を得た。

- (13) a. \*?Ce livre se lit facilement *pour Paul*.  
 [可：0，疑：1，不可：2]
- b. \*Ce texte latin se traduit facilement *pour Paul*.  
 [可：0，疑：0，不可3]
- c. \*?Aucun texte latin ne se traduit facilement *pour Paul*.  
 [可：0，疑：1，不可：2]
- d. ?Ce livre se lit facilement *pour un professeur*.  
 [可：1，疑：1，不可：1]
- e. ?Ce livre se lit facilement *même pour les enfants*.  
 [可：1，疑：2，不可：0]

インフォーマントによって、「pour NP」に対する寛容さの差違がみとめられたが、いずれにしても許容度が高いとはいえない。このことは、フランス語においては中間構文的な意味を表す受動的代名動詞であっても、英語の場合とは異なり、形容詞的な性格は薄いことを示唆すると思われる。

経験者の「pour NP」と共起しにくいという現象は、外項 (external argument) が主語の位置に直接生成される個体レベル述語の形容詞と類似した構造を持つと考えるよりも、表層の主語は内項 (internal argument) であり、受動文等に類似した構造、すなわち非対格の構造を持つと考える方が妥当であることを示唆している。

### 3.2. 「習慣的総称」と「傾向的総称」

Lekakou (2008) は、「総称」に「習慣的総称 habitual generic」と「傾向的

総称 *dispositional generic*」の2つを区別し、次の(14), (15)をそれぞれの代表的な例としてあげている。

(14) John goes to school on foot. [*habitual generic*]

(15) This machine crushes oranges. [*dispositional generic*]

(以上, Lekakou 2008 : 255-256)

「習慣的総称」は繰り返し生起する事象を一般化したものである。これに対して「傾向的総称」は主語名詞句の指示対象の属性が原因となって生じる一定の事態 (*regularity*) を述べるものである (p. 255)。たとえば (15) は主語の *this machine* の属性を記述する文であるが, (14) は出来事を一般化したものであって、特に何かの属性を述べる文ではない。

Lekakou (2008) は、英語などゲルマン系の言語においても、あるいはフランス語やギリシア語においても、中間構文 (*middle*) は「傾向的総称」を表すとする<sup>2)</sup>。

フランス語の受動的代名動詞のうち、中間構文型にかんしては傾向的総称を表すと考えても支障はあるまい。だが未完了受動型はどうだろうか。筆者はこれは「習慣的総称」と表すものとする。未完了受動型の多くは「叙述の類型」の観点からいえば「属性叙述文」である。だが属性叙述文のすべてが「傾向的総称」を表すと考えるべきではない。

(16) a. Le vin blanc *se boit* frais.

b. Le caviar *se mange* avec de la vodka. (Ruwet 1972)

c. Ça *se vend* à la douzaine. (Yamada 2002)

d. [...] grâce à la cohabitation des deux langues officielles qui *se parlent* sur l'ensemble du territoire canadien.

([http://www.ocol-clo.gc.ca/archives/op\\_ap/facts\\_faits/fr\\_canada\\_f.htm](http://www.ocol-clo.gc.ca/archives/op_ap/facts_faits/fr_canada_f.htm))

これらはいずれも未完了受動型の受動的代名動詞の例である。(16a) は「白ワインは冷やして飲むものだ。」というように規範の意味において解釈されることが多く、属性叙述文といえるだろう。だがこの場合の「規範」の価値は、複数の事象・複数の経験をふまえた上でくだされた判断であると考えられる。(16a) や (16b) に対しては「白ワインは (一般に) 冷やして飲まれる」, 「キャビアはウォッカとともに食べられる」という訳を当てることも可能であり、これらの訳文が表しているように習慣的に人々が繰り返し行っているという、その事

象の積み重ねが、主語名詞句の指示対象がいかにあるべきか、という属性につながっていると思われる。これらの文が表す総称性は「習慣的総称」なのである。(16c)は単なる習慣を述べているという解釈が優勢であるように思われるが、文脈によっては「規範」の意味を持つ場合もあり得る。

(16d)は習慣的事象を述べる文といえるだろう。「規範」の意味は持たない。(16d)は「総称文」ではあるが「属性叙述文」ではない。この点において(14)に近いといえる。

一方、「傾向的総称」の文が表す「属性」は、事象の積み重ねによって生み出されるものではない。Lekakou (2008)は上記(15)について、たとえ一度もこの機械を使ってオレンジをつぶしたことがなくても真であり得る、とする(p. 256)。Fagan (1992)の中間構文にかんする解釈もこれに似ている。Faganは中間構文は複数の事象を一般化したものではないという(p. 151)。したがって習慣的読みは持たない。例文(17)について彼女は次のように説明する。

(17) This shoe organizer mounts securely on a door or against a wall.

(Fagan 1992)

この文が述べているのは、靴箱がそのように(安全に据え付けられるように)作られているということであって、たとえ実際には一度も据え付けられたことがなくても、この属性を持っていることにはかわりない(pp. 151-152)。

中間構文の表す事態は、主語名詞句の属性によっておのずと決まってくる事態である。(17)を例にとると、靴箱が壁などにしっかりと固定できるかどうかは、靴箱そのものの物理的構造によって決まることである。この点において、(18)のような属性記述的性格の「自発」(中立的代名動詞)に近い。

(18) Le fer s'oxyde rapidement.

これに対して未完了受動型の(16a)の場合は、たしかに白ワインの持つ風味など、何らかの属性が原因として関与しているのではあるが、そのような属性を考慮して「冷やして飲む」という飲み方を決定するのは「人間」である。

未完了受動型の代名動詞の文は、習慣的総称を表すものであり、その中には(16d)のように「総称文」ではあっても「属性叙述文」ではないものも含まれている。このような点を考慮したとき、未完了受動型の代名動詞の文の統語構造は、形容詞述語の文の構造に近いものと考えるよりも、一般の受動文に近い構造、すなわち非対格の構造をもつと考える方が妥当であろう。

#### 4. 結語

以上、英語等にみられる「中間構文」と比較しながら、フランス語の受動的代名動詞について考えてきた。この問題は「総称性」および「叙述の類型」の問題に深くかかわるものであり、意味・統語両面において興味深いといえることができる。今後もさらに考察を重ねていきたい。

#### 註

- 1) 井口 (2004, 2005) においては「習慣・規範型」と呼んでいたものを、井口 (2007) 以降は「未完了受動型」と呼んでいる。
- 2) Lekakou (2008) はフランス語やギリシア語にかんして、中間構文とは別に「再帰受動 reflexive passive」というカテゴリーを立てており、統語的には中間構文と同じ構造を持つものとする。(この部分の原文は以下の通り。«In Greek and French, middles are syntactically indistinguishable from (formally reflexive) passives.» [p. 249]) ただこの「再帰受動」がどのようなタイプのものまで含むのか(すなわち本稿で「未完了受動型」と呼ぶもの全体を含むものなのかどうか)、そして総称性についてはどちらのタイプに属するのかについては言及していない。

#### 参考文献：

- Ackema, P. & M. Schoorlemmer (1995): «Middles and Nonmovement», *Linguistic Inquiry* 26-2, 173-197.
- Boons, J.-P., A. Guillet et C. Leclère (1976): *La structure des phrases simples en français. Constructions intransitives*, Paris/Genève, Droz.
- Cinque, G. (1988): «On *si* constructions and the theory of *arb*», *Linguistic Inquiry* 19, 521-581.
- Fagan, S. M. B. (1992): *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Fellbaum, C. (1985): «Adverbs in Agentless Actives and Passives», *CLS* 21-2, 21-31.
- 井口容子 (2004): 「受動的代名動詞のモダリティーと中相範疇機能拡張のメカニズム」『ステラ』23 (九州大学フランス語フランス文学研究会), 1-17.
- 井口容子 (2005): 「受動的代名動詞再考——叙述の類型とアスペクト——」, 『フランス文学』25 (日本フランス語フランス文学会中国四国支部), 1-11.
- 井口容子 (2007): 「代名動詞の意味・機能的ネットワーク——自発, 受動, 非人称——」, 『フランス語学研究』41 (日本フランス語学会), 31-44.

- Kageyama, T. (2006) : «Property Description as a Voice Phenomenon», T. Tsunoda & T. Kageyama (eds), *Voice and Grammatical Relations*, Amsterdam, John Benjamins, 85-114.
- Keyser S.J. & Roeper, T. (1984) : «On the Middle and Ergative Constructions in English», *Linguistic Inquiry* 15-3, 381-416.
- Lekakou, M. (2008) : «Aspect Matters in the Middle», Biberauer, T.(ed), *The Limits of Syntactic Variation*, Amsterdam, John Benjamins, 247-268.
- Miller, G. A. (1978) : «Semantic Relations among Words», Halle, M., J. Bresnan, G. A. Miller (eds), *Linguistic Theory and Psychological Reality*, Cambridge, Mass., MIT Press.
- Rappaport Hovav, M. & B. Levin (1992) : «-er Nominals: Implications for the Theory of Argument Structure», Stowell, T. & E. Wehrli (eds), *Syntax and Semantics 26: Syntax and the Lexicon*, San Diego, Calif., Academic Press, 127-153.
- Ruwet, N. (1972) : *Théorie syntaxique et syntaxe du français*, Paris, Éd. du Seuil.
- Stroik, T. (1992) : «Middles and Movement», *Linguistic Inquiry* 23, 127-137.
- Van Oosten, J. (1977) : «Subjects and Agenthood in English», *Papers from the 13th Regional Meeting*, Chicago Linguistic Society, 459-471.
- 山田博志 (1997) : 「中間構文について——フランス語を中心に——」, 筑波大学現代言語学研究会 『ヴォイスに関する比較言語学的研究』, 三修社, 97-131.
- Yamada, H. (2002) : «Sur les deux types de la construction du verbe pronominal passif – la valeur normative et la restriction sur les éléments adverbiaux –», *Études de Langue et Littérature françaises* 80, 208-221.